

耕縁自豊

NO.63 西畑亮一

激暑や酷暑と巷間囁かれる暑い夏を迎えています、みなさんお変わりないでしょうか。7月は山田さんが示された「国家無答責」というキーワードで締め括ったのですが、記録的な気温上昇の最中にも頭はクールにハートは熱くしてキーワードから受け取った知的刺激を、私は楽しめています。ほんとうにありがたいことです。前回書いた穴はとても大きな穴で、ルールのバックボーン自体が問題なので、たとえルールを厳しく教えても、問題は解消されるどころか逆に曖昧になってしまうわけですね。それに警察や検察等々の公権力が剥き出しになる閉鎖的な組織の内部教育は、基本的にOJT（働く中でのトレーニング）のみですから、既存の枠組みを自らが更新していく自浄力のようなものが無ければ旧態然の身勝手な組織論理を純化するだけになってしまいます。

一方、それに対して私たちは、主権者ではあっても現場で実効性ある何らの抗う術も持ち得ないのです。そのような状況の中で、孤独や恐怖や排除の経験を乗り越えながら、山田さん自身がそれらを知的衝撃へと転化されたわけです。しなくてもよい経験から生まれたその成果の一部を、私たちに紹介してくれたんだと思います。苦しい苦しい自らの体験を踏み台にしつつ国家の責任を問い、日本の憲法の研究に向かわれた様子が伝わってきました。さらに、山田さんは被害者の視点で加害者である国家の構造的な問題点を追及するのみならず、別の括りで考えて、加害者でもある自分の立場を含めた総体として、つまり由美子さんの指摘してくれた二項同体的な観点においても、日本という国家の研究に向かわれたんだと思います。その点、3月31日の山田さんが掲げたテーマが「私と戦争責任」であったことにつながるんですね。一緒に考えてほしいので、これに少し絡めてこの8月に想うところを書きましょう。

原爆が初めて人類の頭上に落とされた1945年の8月以降、今年で65回目の夏を迎えました。1946年以来毎年、8月6日は広島で9日は長崎で平和を祈念する式典が行われています。今年はその式典出席者に、バン・キムン国連事務総長や原爆を投下したアメリカ、あの戦争で日本に勝った側のイギリスやフランスの人たちが初めて出席するという事で注目を集めましたね。また、今回の平和祈念式典は、最も多くの戦略核兵器を保持するが故にそのような兵器の自分以外への拡散に最も恐怖するアメリカのバラク・オバマ大統領の2009年4月5日のプラハ演説から始まったとも見える「核なき世界」への大きな潮流に呼応した形でもあったと位置づけたいですね。広島と長崎の式典への出席に関してアメリカに対しいろいろな意見がありますが、私たちの多くが一緒になって少なくとも精神的には式典に参加しているような態度表明こそがチェンジを目指すオバマ大統領の背中を押すチカラを持つことになるのではないかと思います。そのような気持ちを一つにする言わば私たちの精神的な統一と言え、現行憲法第1条にある「日本国民統合の象徴」たる天皇は、この式典に出席されていたのでしょうか。



戦前は統治権の総攬者だったし、戦後は「日本国民の総意に基づく」（同第1条）地位にある人ですから、このような式典への出席は、同法第7条に定めある国事行為と同等かそれ以上の極めて重要な行為になると私には思われます。1945年8月15日正午の玉音放送で「敵は新たに残虐な爆弾（原爆）を使用し無実の人びとを殺しているとも言ってるんだし、「日本国の象徴」（同第1条）たる天皇が、世界で唯一のしかも自国被爆地で開催される全世界に向けた平和を祈念する毎年の式典にもし長年欠席しておられるならば、やはりこれも「国家無答責」の影響ありと言えるのではないのでしょうか。それとも何か他に、私の未だ知らない明証的な出席されない理由があるのでしょうか。みなさんはどうお考えになりますか？